

問 1

「人間」をどのように定義するかは様々だが、思想家たちはしばしばそれを「人間にとって価値のあるものは何か」という問いに答える形で示してきた。例えば資料 1 で述べられているドイツの哲学者エーリッヒ・フロムは人間を「愛という価値を実現しようとする存在」として定義したように見えるし、資料 3 におけるマルクス・アウレーリウス帝は「自らの哲学によって自省すること」に価値を見出し、これを人間の定義にしようとしたと考えられる。

またこうした人間の多義性に加え、それらの価値をめぐって様々な議論が行われてもきた。例えばフロムのように愛という価値の実現のためには人間を部品としてではなく、個性を持った個人として扱う社会構造が必要であると説いた者もいれば、労働者が交換可能な歯車になることによって経済活動がスムーズに進行すると考える資本家もいる。

私自身はこうした先哲たちの思想を踏まえた上で、愛と経済活動の両立をすることこそが目指すべき人間の在り方だと考える。全ての人々が商品化、部品化する資本主義経済の中で、人間同士が互いを尊重し愛することを基盤とする経済活動を実現する方途を探りたい。

問 2

資料 5 ではテクノロジーの発達による社会の変化が、概ね肯定的なものとして取り上げられている。テクノロジーの発達によって生活や社会が変わっていくことは疑う余地もないが、しかしその影響は必ずしもプラスの方向とは限らない。例えばしばしば警鐘が鳴らされるように、人工知能の発達は多くの人々から職を奪う恐れがある。未来社会においてはもはや組織の歯車となるだけの労働者は必要とされず、経済活動に参加することができないかもしれないのだ。自ら思考する、個性的な能力を持った、自立した人間でなければ経済活動に参加出来ない、これが私の考える未来社会の第一の特性である。

また資料 6 で示されているように、未来社会とは気候変動という地球的課題の解決に取り組まなければならない社会でもある。地球的課題はまさにその言葉通り、地球に住むすべての人が解決に向けて取り組まなければ解決しない課題であり、そのためには地球に住むすべての人が一つの共同体をなすという意識を前提とする。自国の経済発展のために温室効果ガスの排出を続けるような狭量な国家主義から脱却し、新しいコスモポリタニズムに到達することも、未来社会の大きな特性と言える。

こうした未来社会で人は自立した人間として経済活動に参画しつつ、地球規模での課題の解決のために共同体を形成していくことが求められるだろう。

問 3

これまで述べてきたように、私は個人としての自立と共同体の尊重という二つの視点を持つ人こそが未来社会における先導者になると考えている。個人の自立と共同体の尊重はどちらも人間という存在の本質に関わっているが、しかしこの両者をバランスよく保つことは決して容易ではない。「自立」や「独立」を重視すれば孤高を気取り、他人を論破して悦に入る傾向が強くなりかねないし、「共同体」や「社会」を尊重すれば、しばしば事なかれ主義や大衆迎合、権威主義に陥ってしまう。私自身もこれまでクラスや部活動、友人関係など様々なコミュニティにおいて、自立と共同体の尊重というジレンマに悩んできた。

ただこれまでの経験を踏まえると、この相反する二つの立場を両立するためには、それぞれに自立した考えを持った人々が、お互いを尊重し合える空間において対話を繰り返す経験が不可欠であるように思える。それぞれが確固とした自分の軸を持ちながら、ある時は相手から影響を受け、ある時は相手に影響を与える、そうした経験を繰り返すことで、自立した個人が互いを尊重し合う共同体が形成できるのではないだろうか。このように考えると、私は SFC において、様々な立場の人と対話をし、合意を形成するという経験に多くの時間を費やしたいという結論に到達した。そしてまた自分自身も、いずれはそのような空間を作る側に回りたいと考える。